

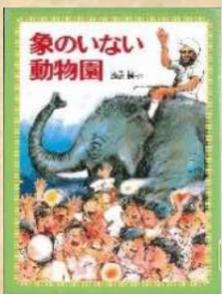
今年で終戦から 70 年

戦争について考えよう

1945年8月15日、たくさんの犠牲者を出した太平洋戦争が終結しました。今回はこの戦争を大きく開戦ごろ・戦中・戦後と三つの時期に分けてそれぞれについて書かれた本を紹介します。



開戦頃



『象のいない動物園』 斎藤憐／作

偕成社 2012年

多くの人から愛されている上野動物園の動物たち。その中の一匹、象のトンキーに厳しくつらい現実が訪れる。戦争ゆえに殺される。なぜ、殺されなければならなかったのか、その後の上野動物園はどうなったのか、実話をもとにした物語。

913

サイ

『よい旅を』 ウィレム・ユークス／著 長山さき／訳

新潮社刊 2014年

貿易商事の日本駐在員として神戸で生活していた著者は、スパイ容疑で日本軍につかまり、刑務所に入られます。著者自身の経験した過酷な日々の記録であるとともに、穏やかで礼儀正しい日本人が戦争でどう変わってしまうのか、日本で暮らした外国人だからこそ見えたものが詰まっています。



949.3

戦中



『翼に息吹を』 熊谷達也／著

KADOKAWA 2014年

特攻隊の戦闘機を整備するひとりの将校は、戦地へ赴く隊員を見送り続ける。自分が整備した戦闘機に乗って、仲間たちが操縦することに誇りを持っている主人公。彼らの出撃を見送る心情とは一体どういうものなのかがひしひしと伝わってきます。

913.6

クマカ

『真夏のオリオン』 福井晴敏／文 網中いづる／絵

講談社 2009年

戦争で武器も燃料も底をつきかけた日本軍の、最後の頼りは潜水艦でした。暗い海の底で戦い続け、乗組員の誰もが「人間魚雷」を使うしかないと思ったとき、艦長はその代わりに一枚の楽譜を海上の敵艦へ送りました。この楽譜が「鬼畜米英」と「野蛮なジャップ」を「人間同士」に戻してくれたのです。



フ

戦後



『八月からの手紙』 堂場瞬一／著

講談社 2011年

敗戦から一年余が経つが希望の兆しが見えない。そんな中、絶望さえ味わった人々の心に明るさが戻ってきた！この場所では、野球場では、笑顔になれる。野球という娯楽が人々の大きなエネルギーとなって明日へと頑張れる。野球を通して描写する彼らの生きる姿に心打たれます。

ド

『禎子の千羽鶴』 佐々木雅弘／著

学研パブリッシング 2013年

広島市の平和記念公園にある「原爆の子の像」のモデルになった少女の話です。広島で被爆して原爆症になり、12歳で亡くなるまで、彼女は弱音をはいたりうらみごとを言ったりせず、周囲の人を思って千羽鶴を折り続けます。長い苦しみをうむ原爆の恐ろしさや平和の大切さ、優しい心など、沢山のことを教えてくれる1冊です。



916

ササ

